

カルヴァンとヒトラー

—— シュテファン・ツヴァイク『カルヴァンに抗するカステリョ、あるいは権力に抗する良心』におけるカルヴァン像とヒトラー像の同一性について

大 川 勇

シュテファン・ツヴァイクに『カルヴァンに抗するカステリョ、あるいは権力に抗する良心』（一九三六）という作品がある（以下、『カルヴァンに抗するカステリョ』と略記）¹⁾。宗教改革の汚点として今も記憶される一五五三年のセルヴェトゥス事件に題材をとり、三位一体論と予定説を受けいれない神学者ミカエル・セルヴェトゥスを異端のかどで火炙りの刑に処した「ジュネーヴの独裁者」²⁾ カルヴァン（一五〇九―一五六四）の非道と、そのカルヴァンに自らの命を賭して宗教的寛容を求める論争を挑んだバーゼルの人文主義者セバスティアン・カステリョ（一五一五―一五六三）の精神的栄光と生の悲劇を描いた小説である。十六世紀の史実に基づき、乏しいながらも当時入手しえた史料と研究文献を駆使して書かれた歴史小説であるが、ナチス支配下のドイツ第三帝国の時代に書かれ、独裁者カルヴァンに対する激しい弾劾につらぬかれた作品であったため、多くの読者がカルヴァンの背後にヒトラーの姿を見た。

たとえば河原忠彦は、その著『シュテファン・ツヴァイク』（一九九八）において、こう述べている。「恐怖政治の圧倒的な権力をもってジュネーブの神の国を統治し、国民全体を突如として画一化するという最初の暴挙に着手した」カルヴァンは、「狂信的な独善者」「良心の自由の抑圧者」「権威主義的イデオロギー」である、と。河原によれば、「ツヴァイクの痛烈な具体的描写を通じてここに見られるイデオロギー、全体主義、画一化、独裁のごとき一連の概念は、カルヴァンを、多少強引のきらいはあるが、まさしくナチの指導者に近づける」（傍点筆者）のであり、それゆえこの作品は「反ナチズム闘争への連帯宣言と見なしうる」のである³⁾。

河原よりも早く、この問題を自身のドイツ亡命文学者論『ドイツを追われた人びと』（一九九一）で取りあげた山口知三は、しかしそこに河原にはない複眼的な視点を導入していた。山口もまた、この作品のカルヴァン像のなかにヒトラーを見てはいるのだが、カルヴァンをヒトラーと同一視する見方には、やや距離を置くのである。山口によれば、前作『ロッテルダムのエラスムスの勝利と悲劇』（一九三四、以下『エラスムス』と略記）におけるツヴァイクのプチブル性を痛烈に批判した共産党系の亡命者たちも「この作品の反ナチス性」は認めていたという。その傍証として山口があげるのは、ひとつには、一九三六年七月にモスクワで創刊された亡命雑誌『ヴォルト』の創刊号にツヴァイクの『カルヴァンに抗するカステリョ』序文が掲載されている事実と、もうひとつには、『歴史小説論』（成立一九三六―三七、ロシア語での雑誌掲載

一九三七―三八、ドイツ語版一九五五)において『エラスムス』を全面否定したルカーチが、なぜか『カルヴァンに抗するカステリョ』については一言も言及していないという事実である。この作品の存在をルカーチが知らなかったはずがないと考える山口は、この第二の事実、『カルヴァンに抗するカステリョ』への肯定的評価というよりもむしろ、ルカーチの「賢明」な判断の存在を推察しているのだが、それというのも、作者ツヴァイクの意図がナチスとヒトラーに限定されない「あらゆる狂信」「歴史上の全独裁者」への弾劾であることを察知したルカーチが、スターリン批判への抵触を恐れて言及を回避した可能性を見ているからである。この視点を山口は、ツヴァイクの同時代人として反ナチス亡命文学の動向を追っていた和田洋一の、カルヴァンを「二十世紀ドイツの独裁者、歴史上の全独裁者」と重ねあわせる読み方にヒントをえて獲得したのだが⁴⁾、しかしその山口もまた、カルヴァンの背後に主としてヒトラーを見ることにおいては変わりなく、この作品が「独裁政治に対する糾弾の書である以上、反ヒトラー、反ナチズムの書であることは自明である」との立場をとる⁵⁾。

以上、基本的にカルヴァンの背後にヒトラーを見る点では共通するものの、河原の場合はそこに「多少強引のきらいはあるが」という留保をつけ、山口もまた、カルヴァンのなかにヒトラーとは別の「独裁者」をあわせ見る可能性を示唆していた。しかし、近年この問題を新たに取りあげた恒木健太郎は、その大塚久雄論『「思想」としての大塚史学』(二〇一三)のなかで、これまでになかったほど直裁にカルヴァンをヒトラーと同一視している。より正確に言えば、彼の着目した大塚久雄へのあるインタビューにおいて、インタビュアーの頭のなかにある「カルヴァン＝ヒトラーという図式」⁶⁾をそのまま受けいれている。

恒木が着目したのは、『大塚久雄著作集』第八巻に収められたインタビュー「二つの自由——ツヴァイク『権力とたたかう良心』をめぐって——」(一九六三)であった。そこでインタビュアーがどのような「カルヴァン＝ヒトラーの図式」を持ち出してくるのか、その発言のうちの主要なものを抜き出してみよう。[以下、付した番号および傍点はすべて筆者による。]

(一) この本は『権力とたたかう良心』という題なのですが、権力というのがカルヴァン、良心がカステリオンというわけです。ここにまず問題があると思うのですが……。

(二) それで、結局カルヴァンが、頭のてっぺんから爪の先まで胃で身を堅めた独裁者で、あらゆる武器をもっていたのに対して、カステリオンはまったく無力で何も持たない人間だ、ただあるのは良心だけだ、……自由を求める良心だけがカステリオンにある、ということは、カルヴァンにはそういうものはなくて、彼カルヴァンにはまさにテロというのですか、スパイ網に支えられたそういう独裁者の権力のみがあると、ツヴァイクはこう設定して、それでつらぬいて書かれている……。

(三) [……] もう一つ本書で決定的にいわれていることに、ちょうど、ヒトラーが「余は

ドイツ民族である」、ルイ十四世が「朕は國家なり」というような信念をカルヴァンは冷酷なまで確信していたということがあります。カルヴァンは「神の意志を正しくこの地上に伝えるのは自分の使命である。そして私のみが、それをなすことを得る。だからわたしのみが正しい」と言つて、他の人々の意志とか良心というものはまったく認めなかったということを、ツヴァイクは痛烈に叩きつけているのです。ツヴァイクは、宗教改革とはもともと魂と宗教の自由運動として始まったものだ。それなのに、カルヴァンという一個の権力意志によって、その運動は逆に中身がとってかわったのだ。神の意志が、カルヴァンの行なったようなことでなければ地上で行われ得なかったとすると、ツヴァイクは、そのようなものは要らないとまで言っている。そうまでして神の恩恵や摂理にあずかることはないというのです。もちろん、これはヒットラーという目前の敵を意識しての言葉でしょうが。

(四) 次にカルヴァンの「預定説」ですけれども、ツヴァイクによれば結局カルヴァンは偉大な狂信者であつたということになるのですが、このカルヴァンの信仰の中心をなすと思われる「預定説」[……]について、簡単にはいいえない問題とは思いますが、おうかがいしたいのですが。

(五) それからツヴァイクは、カルヴァンが実によく働く、それも宗教、政治、日常のことにまでああ働いているのは、権力欲と、一度握った権力にしがみつくる人間特有の傾向で、あれで人間の気持ちが分かるかと……

(六) カルヴァンが現実の世界、政治の世界で勝利を得たのは、自分が真理であることを疑ったことは一瞬たりともない、まさにこの自信、預言者的狂信、この偉大な偏執狂のおかげであつた。政治的勝利はそのおかげであつたと……。

(七) 最後に、ツヴァイクはユダヤ人、それもブルジョアのユダヤ人として、ヒットラーが出てきたために身の危険が迫り、財産をすてて、国外に亡命せざるをえなかった。それに、ヒットラーというドイツにとっては外国人が代つて権力を握つたという、この現実が、図式的にはカルヴァン対カステリオーネの関係に二重写しになるので、カルヴァンを代用して、ヒットラーに激しい抵抗を示した。このことは前にもふれましたが、このユダヤ人・ユダヤ教というものは、ヒットラーの問題を離れても、カルヴィニズムに対して宗教的に何か特別なものがあるのではないか、とも思うのですが、どうなのでしょう。

(八) ですからこの本については、ヒットラーに対して、あの時点でこういう激しいプロテストをしたという意味ではたいへん立派なものだ、とはいえませぬ⁷⁾。

歴史小説『カルヴァンに抗するカステリヨ』の梗概にもなりそうな内容であるが、一貫してインタビュアーが作品中のカルヴァンをヒトラーと同一視していることがわかるだろう。彼にとってカルヴァンは、「頭のとっぺんから爪の先まで胃で身を堅めた独裁者」、それも「権力欲」と「預言者の狂信」に駆られて「スパイ網」を駆使した「テロ」を行う「偏執狂」的「権力意志」であり、ツヴァイクの『カルヴァンに抗するカステリヨ』はそのような独裁者カルヴァンの名を借りた、ヒトラーに対する「激しいプロテスト」の書なのである。

ところが、このインタビューを受けた大塚久雄は、こうしたインタビュアーの問いかけにことごとく反論する。インタビュアーの(一)(二)の問いかけに対しては、カルヴァンを「独裁的テロリスト」、カステリオンを「その前にふるえる小雀のごときもの」と見なすのは当時のヨーロッパの歴史的状况に照らしあわせて正しい認識とは言えない、事實は、絶対王政の権力およびそれと結びついたカトリック教会の強大な教権の前に、カルヴァンこそが逆に危うい立場にあったのであり、カステリオンを含む自由思想家（「リベルティン」）たちは、「小雀」どころか、社会経済的に見ると都市貴族と呼ばれる大商人・大金融業者と結びついて絶対王政の権力の側につき、カルヴィニズムを支える勤労民衆に激しい圧迫を加えていたのだ、と言う。大塚に言わせれば、カルヴァンはそのような圧迫のなかでジュネーヴという「眇^{びよう}たる反抗の一拠点」を作り、「内面的な良心の自由」を護りぬこうとしていただけなのであって、そのカルヴァンをあたかもヨーロッパ全体に君臨する「独裁者」のように見なすのは、事実を逆立させた錯誤的見方なのである。この大塚の視点に立つと、カルヴァンとカステリヨの立ち位置は完全に逆転する。

セルヴェートやカステリオンたちは、カルヴァンたちの眇たる抵抗の拠点の内部では、いちおう圧迫されていたといえるでしょう。が、かれらが圧迫されたのは、カルヴァンたちが必死の抵抗の拠点としていたその内部での話なのですね。そこから外に一步でも出れば、カルヴァン自身が危い。その内部でさえしばしばそうだった。だから、いったいカルヴァンが独裁者であってカステリオンは弱い小雀のように追いかけまわされたんだというふうに表示することは、その当時のヨーロッパ全体の歴史の流れのなかにおいてみると、ちょっと私には、バランスを失しているのではないかと思われるのですがね⁸⁾。

カルヴァンの冷酷なまでの宗教的信念をヒトラーの政治的信念と重ねあわせる、(三)の問いかけに対してはこうである。

お話を聞いてますとね、なにかカルヴァンを論じながら、じっさいはヒトラーを論じている。カルヴァンのイメージとヒトラーの姿を重ね写真にしておいて、実質的にはヒトラーを論じている。そういう感じがしないでもないと思うのですが、どうでしょう。それは、ある点では、そういう重ね写真も全然できないとはいえない。およそ、キリスト教的禁欲という思想の長い歴史をみますとね、その雰囲気のうちから生れ出たプラスの、ある

いはマイナスのさまざまな思想というものは、禁欲的という一点で多かれ少なかれ似たような側面をもっている、ちょっともおかしくはないと思うのです。たとえばずっと遡りますと、ヴェーバーが指摘しているように、イスラエルの預言者たちだって、自分こそが神の代言人だとして民衆に悔改めを呼びかけたわけでしょう。そういう自己確信をすぐさま独裁者だというなら、どういうことになるのでしょうか。それからずっと続く大きな流れのなかには、カルヴァンも入るでしょうし、クロムウェルも入るでしょうし、ある意味ではヒトラーも、それからスターリンの姿さえその流れのなかにみられないこともない。その意味でそれらすべての人々のあいだに、ある共通点がないとはいえない。キリスト教的禁欲が残した外側のかたちでは共通点があると言えるでしょうが、だからそのなかに盛られている精神的・内容的な面でも同一視するということになる、私はひじょうに問題だと思うのです⁹⁾。

ここでインタビューアーの「カルヴァン＝ヒトラーの図式」を見抜いた大塚は、この図式に代わる、カルヴァンからクロムウェルを経てヒトラー、スターリンにいたる「独裁者」の系譜図を提示し、その「キリスト教的禁欲」に基づく「自己確信」ないし信念の外面的共通性を認めたくて、しかしそこに盛られた「精神的・内容的」の違いを盾に、「カルヴァン＝ヒトラーの図式」を峻拒する。大塚にとって、ヒトラーへのプロテストを「ほかならぬジャン・カルヴァンにうつしかえて、そして、その行動様式のある種の外面的な共通性のために、カルヴァンを、ヒトラーと全く同じに考える」¹⁰⁾ ことなど言語道断なのである。

和田洋一の、カルヴァンを「二十世紀ドイツの独裁者、歴史上の全独裁者」と重ね合わせる読み方と表層の一致を見せつつ、しかし和田とは逆に、その正当性を断固として拒否する大塚の発言はきわめて興味深い。というのもここに、ツヴァイクの『カルヴァンに抗するカステリョ』をどう読むか、という問題が凝縮されているからである。はたしてツヴァイクのカルヴァンはヒトラーなのか、それともヒトラーを含む歴史上のすべての独裁者なのか。あるいは、問いの形を変えるなら、ツヴァイクのカルヴァン像にはどの程度ヒトラーが織り込まれているのか。それははたして、大塚のいう「ある種の外面的な共通性」にすぎないのか、それとも「精神的・内容的」にまで及ぶ共通性が認められるのか。

この点に関連して、ひとつ看過できない発言がインタビューアーからなされている。(七)の問いかけで彼はこう言っていた。「ツヴァイクはユダヤ人、それもブルジョアのユダヤ人として、ヒトラーが出てきたために身の危険が迫り、財産をすてて、国外に亡命せざるをえなかった。それに、ヒトラーというドイツにとっては外国人が代って権力を握ったという、この現実が、図式的にはカルヴァン対カステリオンとの関係に二重写しになるので、カルヴァンを代用して、ヒトラーに激しい抵抗を示した」。ここでインタビューアーはツヴァイクの国外亡命の理由をストレートにヒトラーの出現に求めているが、これは事実誤認とすべきだろう。ツヴァイクが亡命を決意したのは、一九三四年二月十八日、社会民主党の武装組織「防衛同盟」^{シュッツフント}の武器を隠匿した容疑でザルツブルクの自宅が警察の家宅捜査を受けた日のことである。当時のオーストリアはアウス

トロ・ファシズムの支配下にあり、数日前の二月十二日にはヴィーンやリンツで防衛同盟の武装蜂起があったばかりだった。二日間の銃撃戦の後、防衛同盟は鎮圧され、以後オーストリアの左翼は壊滅状態に陥るのだが、キリスト教社会党のドルフスを首相とするファシズム体制にとって、敵は社会民主党だけではなかった。もう一方にナチスという強大な敵がいて、オーストリアとドイツの合邦を虎視眈々と狙っていた。ドルフスの独裁政治は左翼撲滅のみならず、ナチスからオーストリアを守ることをも目的としており、事実ドルフスは一九三四年七月、クーデターを謀ったオーストリア・ナチスの凶弾に倒れるのである。つまり、一九三四年二月に亡命を決意するほどの「身の危険」をツヴァイクに感じさせたのは、少なくとも直接的にはインタビュアーが言うようなヒトラーの出現ではなく、反ファシズムの陣営から当時「緑色のペスト」と呼ばれたアウストロ・ファシズムによる独裁体制の確立なのであった¹¹⁾。

この政治的背景は——大塚久雄のインタビューとは関わりなく——すでに山口知三によって指摘されている¹²⁾。にもかかわらず、大塚久雄へのインタビューについて論じ、そこで山口の書から引用してもいる恒木健太郎は、インタビュアーの事実誤認に気づかない。(七)の問いかけを自身の論考で取りあげていながら¹³⁾、この政治的背景を無視し、インタビュアーと同じ視点に立って「カルヴァン＝ヒトラーの図式」を疑わない。それはなぜなのか。

ひとつには、恒木の主たる関心が大塚久雄の思想とユダヤ人問題という別のところにあるからであろうが、もうひとつには、彼がツヴァイクとともに、いやツヴァイクと一体となって、カルヴァンおよび(ユダヤ人を迫害した)ヒトラーに対する怒りを叩きつけているからであろう。

洗礼式でちょっと笑っただけで、説教時に居眠りしただけで、投獄される。賭けごとやトラップ等の遊びは禁止事項とされ、これを破れば投獄やさらし者である。果てはカルヴァンを「先生」とよばずにカルヴァン「さん」と言っただけで投獄、歌を陽気に歌えば市外追放、殴り合いをすれば死罪、猥褻な言動をすれば人だかりのなかで燃えさかる焚き木の前に立たされる。そしてカルヴァンの教義に否をとない者にはたいしては、鞭打ち、拷問、死刑などの過酷な刑罰が科せられた。[……] ツヴァイクによれば、ジュネーヴ市民の行動はスパイによって監視され、カルヴァンに密告された。いつ自分の知らぬところで自分の身が危険にさらされるかわからない。その恐怖が蔓延した結果、ジュネーヴはカルヴァンの望みどおりの都市となった。神を恐れる、臆病で、醒めた、無抵抗でカルヴァンの意志に服従する都市に¹⁴⁾。

カルヴァンの恐怖政治に支配された、作品中のジュネーヴ市民の生活を自らの言葉でこう要約した後、ツヴァイクの批判の矛先とその意図について恒木は言う。

かれが問題としたのは、単に教義上のことだけではなく微細な生活慣習までもが監視対象となり、ひとつまちがえば投獄ではすまず市外追放や死刑にまでいたったということである。

すなわち、民衆の生活のすべてがひとつの「規律 (discipline)」に支配されるという事態である。ツヴァイクはカルヴァンの所業と帰結を描くこの章のタイトルを「規律」としたが、それはカルヴァンの支配がもたらしたジュネーヴ市内の寒々しい光景をナチス独裁下のドイツと重ねるためだった¹⁵⁾。

こうして、カルヴァンの恐怖政治はヒトラーの独裁政治と重ねあわされる。カルヴァンの支配する「ジュネーヴ市内の寒々しい光景」は「ナチス独裁下のドイツ」と二重写しにされ、それによって、セルヴェトゥス処刑の不当性を正面から突きつけたカステリヨに対するカルヴァンの迫害は、ナチズムを批判するドイツの人文主義者やユダヤ系知識人に対するヒトラーの弾圧を透視させるものとなる。そのとき、カステリヨを迫害するカルヴァンについての記述が、その執拗さと陰湿さへの強い怒りを伴うものとなったとしても不思議ではない。

ツヴァイクによれば、カステリオンはセルヴェ殺害に対して公然と批判をした唯一の人文主義者である。それがためにかれはカルヴァン一派からえんえんと命を狙われつづけた。しかも、カルヴァンはみずから手をくだそうとせず、その手下や取り巻きを使ってかれを裁判の場へとひきずりだし、死にいたらしめようとしていた¹⁶⁾。

このような執拗かつ陰湿なカルヴァンの迫害にひるむことなく、カステリヨは宗教的寛容についての論争を挑みつづけるのだが、そこに見られるカステリヨの決然たる態度と粘り強さは、そのままこの歴史小説を書く作家ツヴァイクの姿勢へと移しかえられ、〈カルヴァンに抗するカステリヨ〉の像は〈ヒトラーに抗するツヴァイク〉の姿へと、ごく自然にスライドしていくのである。だから『カルヴァンに抗するカステリヨ』の序文においてツヴァイクが、カステリヨの挑んだ論争は狭い神学上の問題ではなく、セルヴェトゥスというひとりの人間に留まる問題でもなく、「それよりもずっと広がりをもつ、超時代的な問題」だと述べ、そこに「ワレワレノ事ガ論ジラレテイル」(nostra res agitur)¹⁷⁾ というラテン語の一文を差しはさんだとき、その言葉の意味するものを、恒木は直ちに次のように理解した。

「われわれの問題、われわれの争点」。ツヴァイクにとってはそれが、じつはナチス独裁にどのように対抗するのか、という「問題」であり、それへの服従か反抗か、という「争点」であった。一九三四年冬、ザルツブルクにおいてツヴァイクは、武器隠匿の嫌疑で家宅捜査をうけ、イギリスに亡命する。このとき、かれはカステリオンのごとく筆一本で昂然とナチズムにたたかいを挑むことに決めたのである。そして、信仰や言論等の自由を認めなかったカルヴァン神政の独裁的内容のなかにナチスと同一のものをみだし、それと全面的に対決すべく書かれたのが、『権力とたたかう良心』であった¹⁸⁾。

恒木の言うように、仮にツヴァイクが「カステリオンのごとく筆一本で昂然とナチズムにたたかいを挑」んだのだとしても、それを決意したのはしかし、「このとき」ではなかったであろう。先に述べたように、そのときツヴァイクにとって最大の脅威だったのは眼前に迫った「緑色のベスト」だったのであり、ナチズムという「褐色のベスト」が彼を襲うのはその後のことであつたと思われるからである。「緑色のベスト」と「褐色のベスト」の違いについて明確にしておくために、ここでもう一度山口から引用しておこう。当時、亡命週刊誌『ダス・ノイエ・ターゲブーフ』を編集発行していたレーオポルト・シュヴァルツシルトは、ナチスと闘うためにはドルフースとでも手も組むべきだと主張し、実際にその創刊号（一九三三年七月一日号）にドルフースの論文を掲載した。それを批判する声に対し、彼はこう答えたという。「たとえドルフース氏がファシストであるとしても、ナチズムに対する彼の戦いは、絶対に、二種類のファシズム間の争いといったものではなく、ゴリラに対するファシストの戦いである」。

つまり、彼に言わせれば、ファシズムは、なにはともあれ一つの人間的統治形態であるが、ナチズムは、人間性のひとかけらもない野獣の破壊行為であり、両者の間には本質的な相違があるというわけである。[……] 三四年二月二四日刊行の『ダス・ノイエ・ターゲブーフ』誌上で、シュヴァルツシルトは次のような論陣を張った。「いまや問題は、ヨーロッパの支配権をめぐる戦いである。[……] この戦いに際して、ドルフースとヒトラーを区別しないで、どうするのだ。この戦いに際して、オーストリアに護国団の旗がひるがえっているか、鉤十字の旗がひるがえっているかは、ゆゆしい相違なのだ。[……]」¹⁹⁾

このように「緑色のベスト」と「褐色のベスト」、ドルフースとヒトラーを区別する視点に立つとき、ツヴァイクのカルヴァンを、恒木のようにストレートにヒトラーと結びつけることはできないだろう。少なくともそこに、社会民主党を武力で壊滅させたドルフースの影を無視することはできないはずである。事実ツヴァイクは、一九三四年出版の『エラスムス』についてはこう語っていた。

私のエラスムスは、どんな狂信に対しても、思考を一つの規範に押し込めようとするどんな試みに対しても、（それがファシズムであれ、 Kommunismusであれ、ナチズムであれ）断固として抵抗するのです²⁰⁾。

一九三四年八月二七日付のルネ・シッケレ宛ての手紙でこう語ったときのツヴァイクは、『エラスムス』のルター像にヒトラーだけを刻みこんだのではなかった。「それがファシズムであれ、Kommunismusであれ、ナチズムであれ」と言われているように、そこには少なくともドルフース（＝ファシズム）、スターリン（＝Kommunismus）、ヒトラー（＝ナチズム）の姿が等価に、あるいはこの順番に織り込まれており、さらにはそうした個々の狂信者を越えたあらゆる狂信の理念

型としてのルター像が造形されていたのである。だが、はたしてツヴァイクは、二年後の『カルヴァンに抗するカステリヨ』についても、これと同じことを言ったであろうか。

というのは、この作品におけるツヴァイクのカルヴァンに対する弾劾は、『エラスムス』のルター批判をはるかに凌ぐ圧倒的な迫真力をもって読者に伝わり、恒木にその作用を及ぼしたような、つよく同調を強いる力を持っているからである。恒木だけではない。『エラスムス』におけるツヴァイクのプチブル性を痛烈に批判しながら「この作品の反ナチス性」は認めていたという多くの共産党系の亡命者たちもまた、この作品から放射される圧倒的な迫真力のゆえに、カルヴァンをヒトラーと同一視したのではなかったか。考えても見よう。仮にドルフースとスターリンとヒトラーを理念的に抽出し、統合した人物を頭のなかで想定できるとして、ツヴァイクのカルヴァンはそうした狂信者の理念型として描かれているだろうか。そのような抽象化された人物に、ツヴァイクはあれほどの怒りを叩きつけることができただろうか。あのカルヴァンのなかには、やはり生身の肉体性を帯びた、ひとりの独裁者がいたのではなかったか。

ひとつ断っておくと、ツヴァイクのカルヴァン像を峻拒した大塚久雄は、インタビューをうけた時点で、じつはまだ『カルヴァンに抗するカステリヨ』を読んでいなかった。読んでいなかったにもかかわらず、インタビュアーから聞かされたツヴァイクのカルヴァン像が自らの知る歴史上の宗教改革者カルヴァンと大きく乖離していたために、その受けいれを拒んだのである。もし大塚がこの作品を読んでいたら何と言ったか、聞いてみたかった気がするが、それは叶わないにしても、ここにもうひとつ興味深い事実がある。社会経済史家として自らの学説に適合するかたちでカルヴァンを捉えていた大塚久雄以上に、ある意味、等身大のカルヴァンをよく理解していたはずのユマニズム研究の泰斗、渡辺一夫もまた、ツヴァイクのカルヴァン像をそのまま受け入れてはいないという事実である。

『フランス・ルネサンスの人々』（一九七一）の第一〇章「ある教祖の話(a)——ジャン・カルヴァンの場合」において、渡辺一夫はその冒頭部をこう書きだしている。

ジャン・カルヴァン（カルヴィン）から、ただ冷酷無残な人間のような印象だけしか受けない人々もいるかもしれません。私も、カルヴァンが、玲瓏玉のごとき人柄であり、春の海のように温厚寛大であったとは思いません。しかし、徹頭徹尾鬼のような人間であったとは考えられないのです。持って生れた性格のせいもありましょうから、自分の理想の達成のためには一切を犠牲にしてもかまわぬという激情が、当然カルヴァンに果敢な行動を取らせるにいたったと思いますが、彼の理想の達成を阻むものが、どれほど強大であったか、また、どれほど執拗な圧力を、彼のひたむきな行動に加えていたかに思いいたる時、カルヴァンだけを咎めるわけにはゆかなくもなります。そこには、カルヴァンの悲劇と申すよりも、人間そのものの悲劇とでも言ったらよいものがあるように思います²¹⁾。

渡辺は一般論としてこう言っているのではない。『フランス・ルネサンスの人々』では、カル

ヴァンの章の直前の第九章には「ある神学者の話(a) ミシェル・セルヴェの場合」が、また第一二章には「ある神学者の話(b)——セバスチアン・カステリヨの場合」が置かれていることからわかるように、セルヴェトゥス事件とその後のカステリヨに対するカルヴァンの執拗な迫害を十分に知ったうえでの叙述である。セルヴェトゥス事件については第九章で、「宗教改革のなかにある悪寒を起こさせるような、いらいらさせるような、暴君的なものの一切が、カルヴァンにある」という批判の声を紹介する一方、セルヴェトゥスの「死刑は、カルヴァンのみの特別な過失ではなかった。これは時代の過失であった」というカルヴァン擁護の声も同時に伝え、自身としては擁護論に傾いて「カルヴァンおよびカルヴィニズム、またカルヴァンをかく硬化せしめた当時のカトリシズム、またその時代、これらに一切の罪はあるのでしょうか。さらに広く申せば、人間に罪があるのでしょ²²⁾」と結論づけている。カルヴァンの章にもどれば、冒頭部から一貫してカルヴァンをあまりにも純粋な「理想家」と捉え、「カルヴァンがジュネーヴへ打ち樹てようとした謹厳な生活」に反対した「リベルタン」たちについては、「《個人の自由》に恋々とし、カルヴァンの切ない心根もその高い理想も理解しようとしなかった人々」と、大塚と同様、いや大塚以上に否定的評価を下している²³⁾。渡辺にとって、カルヴァンの恐怖政治は「峻厳そのものの灰色の布を、まずジュネーヴの町に張りめぐらし、神のために己れの理想郷を出現せしめようとした」行為であって、セルヴェトゥス事件を頂点とする彼の肅正行為の数々は、たんに「度が過ぎた感じ」をあたえるにすぎない²⁴⁾。ユマニストとして出発したカルヴァンが「ジュネーヴの独裁者」となって以降、「懷疑」の精神を失ったことを「悲惨」としつつも、宗教改革者としてその理想の実現に邁進したことを考えあわせれば、そこに見られるのは「ジャン・カルヴァンの偉大さと悲惨」²⁵⁾であった——そう考える渡辺は、さらにスターリンをも引きあいに出し、あのコミニズムの独裁者が血の肅清を重ねるにいたったのは、「スターリンの性格にもよるとしても」、「ソヴィエト・ロシアの《理想》を理解してやろうとせず、それを人間世界のものとして消化する意志もなく、ただひたすらソヴィエト・ロシアを恐れ、その徹底的な抹殺によってのみ生きようとして、技を練り術を磨いた周囲の国々の圧力の結果と考えられる点があるかもしれぬ」と言って、これと同じことがカルヴァンの身にも起こったと解するのである²⁶⁾。まるで、「理想」を求めている行為であれば、いかなる肅正、虐殺も容認されと言わんばかりに。

いかにも「度が過ぎた」カルヴァン擁護、独裁者擁護であるが、それにたいする論評はひとまず措く。本題にもどれば、上に見た、渡辺一夫のカルヴァンの捉え方が、基本的に大塚久雄とはほぼ同じであることが確認できるだろう。しかし、大塚と異なる点がひとつある。渡辺はツヴァイクの『カルヴァンに抗するカステリヨ』を読んだうえで、なおもこう言っているのである。上に引用したエッセイの初出は一九五七年であるが²⁷⁾、渡辺は『寛容について』(一九七二)に収められた「ある神学者の話(セバスチアン・カステリヨの場合)」の「附記一」において、「ステファン・ツヴァイクの名著 *Ein Gewissen gegen die Gewalt, Castellio gegen Calvin* (1936) は、高杉一郎氏の御努力によって、『権力とたたかう良心』と題されて、昭和三十八年(一九六三年)みず書房から翻訳上梓され」たと紹介し、この書を「ヨーロッパにおいて、カステリヨを、現

代的意識をもって眺めた最初の論考の一つ」として推奨している²⁸⁾。この附記の日付が「juin 1964」であり、その後一九七一年にこのエッセイの最終的な形が確定したことを思えば、また、渡辺一夫という学者が「改版のたびに、それまでの研究・調査に基づいてたえず訂正・加筆を行っている」²⁹⁾ 書き手であることを考慮すると、上に見たエッセイにおける渡辺のカルヴァン把握は、ツヴァイクの『カルヴァンに抗するカステリヨ』におけるカルヴァン像を知ったあともなお、修正されなかったと判断していいだろう。

ふたりのカルヴァンがいたのだろうか。キリスト教の理想郷を神のために作ろうとし、この目的のためにはあらゆる敵と闘う信念の理想主義者カルヴァンと、宗教改革の本来の目的を忘れ、自分の教義に従わぬ者には容赦なく権力を行使し、虐殺すら厭わない狂信的独裁者カルヴァンとが。おそらくそうであろう。歴史の見方は見る者の立ち位置によって変わる。スターリンですら、あるフランス文学者によれば「理想」の追求者となりうるし、ヒトラーですら、ある経済史家によれば「一から十まで全部むちゃくちゃだとは思いません」³⁰⁾ と言われることになる。いかなる立場をとるにせよ、ひとりの人間の歴史の見方を決定づけるのは、彼の内部に根源的価値基準として埋め込まれた〈正しい生〉の観念であろう。それがなければ人間として生きるに値しないとまで思念されるひとつの観念——ツヴァイクにとって、それは人文主義的「自由」の観念であった。「人間としてあるための、思想の自由の名において」、ユマニスト＝カステリヨはカルヴァンに立ちむかった。この十六世紀のユマニストを襲った狂信的独裁と同じものが二十世紀のフマニスト＝ツヴァイクを襲ったとき、ツヴァイクはカルヴァンのなかに「あらゆる精神的圧制」の原型を見たのである³¹⁾。

問題は、作品中に描かれたカルヴァンに、どのようなかたちで二十世紀の狂信的独裁者が投影されているかである。ツヴァイクのカルヴァンはほぼ完全にヒトラーなのか、あるいはルカーチが察知し、渡辺一夫も読みとったように、スターリンの存在が少なからず投影されているのか。仮にヒトラーの影がもっとも濃くツヴァイクのカルヴァン像を覆っているとして、それは大塚久雄が言ったように、両者のあいだに「ある種の外面的な共通性」があるにすぎないのか、それともそこには「精神的內容」にまで及ぶ共通性が認められるのか。

こうした問題を検討するためには、以下の考察が必要となる。第一に、『カルヴァンに抗するカステリヨ』におけるカルヴァン像がどの程度史実に忠実であるかを検証しなければならない。もしも史実からののはなはだしい偏差が見いだされたら、そこに二十世紀の独裁者の影を読みとることができるだろう。第二には、『エラスムス』におけるルター像を『カルヴァンに抗するカステリヨ』におけるカルヴァン像と比較しなければならない。『エラスムス』のルター像が仮にドルフスとスターリンとヒトラーから抽出された独裁者の理念型だとすれば、そのルター像と『カルヴァンに抗するカステリヨ』のカルヴァン像との偏差を検証することによって、カルヴァン像に投影された独裁者の実体が具体的形姿をまとうて見えてくるかもしれない。第三には、もしも第二の考察によってカルヴァン像の有力な実体としてヒトラーが浮上した場合、現実のヒトラー像とツヴァイクのカルヴァン像がどの程度一致しているか、検証しなければならない。狂信

的独裁者という抽象的観念とは異なるレベルで両者を結ぶ共通項が浮かび上がってくれば、そのときはじめて、本稿の副題に示されたテーマ——「シュテファン・ツヴァイク『カルヴァンに抗するカステリョ、あるいは権力に抗する良心』におけるカルヴァン像とヒトラー像の同一性について」——に答が得られるであろう。本稿は、以上の問題にたどり着くための予備的考察であった。

註

- 1) 使用したテキストは、Stefan Zweig: *Castellio gegen Calvin oder Ein Gewissen gegen die Gewalt*. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch 1983. 初版は一九三六年、ウィーンのライヒナー (Reichner) 社から刊行された。邦訳『権力とたたかう良心』(高杉一郎訳、みすず書房、一九七三年[初版一九六三年])は、明記されていないものの、この一九三六年の初版ではなく、一九五四年の第二版 (*Ein Gewissen gegen die Gewalt. Castellio gegen Calvin*. Berlin/Frankfurt am Main: S. Fischer 1954) に基づいているものと思われる。これについては、上記テキストの編者後書きを参照されたい。Knut Beck: *Nachbemerkung des Herausgebers*. In: a.a.O., S.243f. なお、この作品に登場する人物名の表記については、翻訳者および論者によってかなりの差異がある。本稿では、以下に記す辞書、事典、研究書に依拠して、Sebastian Castellio を「セバスティアン・カステリョ」、Michael Servet を「ミカエル・セルヴェトウス」と表記するが、カステリョについては「セバスチャン・カステリオン」「セバスチアン・カステリオン」、セルヴェトウスについては「ミゲル・セルヴェート」「ミゲル・セルヴェ」「ミシュル・セルヴェ」等の表記が見られる。すべて同一人物である。Duden. *Aussprachewörterbuch*. 3., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage, Mannheim/Wien/Zürich 1990. 『キリスト教人名事典』日本基督教団出版局、一九八六年。ハンス・R・グッギスベルク『セバスティアン・カステリョ——宗教寛容のためのたたかい』出村彰訳、新教出版社、二〇〇六年。
- 2) 渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』岩波書店(岩波文庫)、一九九二年、二七四頁。
- 3) 河原忠彦『シュテファン・ツヴァイク——ヨーロッパ統一幻想を生きた伝記作家』中央公論社(中公新書)、一九九八年、201頁以下。
- 4) 『カルヴァンに抗するカステリョ』を翻訳した高杉一郎の訳者解説によれば、一九三六年当時雑誌『文芸』(改造社)の編集者だった高杉の依頼に応じて和田洋一が同誌に書いたこの作品の紹介文は、次の言葉で結ばれていたという。「カステリオンは槍をとりあげる気でペンを取った。ツヴァイクもまったくおなじような気持で、カルヴァン——二十世紀ドイツの独裁者、歴史上の全独裁者を相手にペンを走らせているのである」。邦訳『権力とたたかう良心』、三六五頁。
- 5) 山口知三『ドイツを追われた人びと——反ナチス亡命者の系譜』人文書院、一九九一年、六四頁以下。(とくに七五頁以下。)
- 6) 恒木健太郎『「思想」としての大塚史学——戦後啓蒙と日本現代史』新泉社、二〇一三年、三一四頁。
- 7) 大塚久雄「〈インタビュー〉二つの自由——ツヴァイク『権力とたたかう良心』をめぐる——」『大塚久雄著作集』第八巻「近代化の人間的基础」所収、岩波書店、一九六九年、五七八頁以下。
- 8) 同上、五八三頁。
- 9) 同上、五八四頁。
- 10) 同上、五九〇頁以下。
- 11) 山口、前掲書、八六頁以下。ナチス突撃隊の制服の色から「褐色のペスト」と呼ばれたナチズムに

対し、キリスト教社会党の武装組織に出自をもつ「^{ハイムヴェーア}護国団」の制服の色から、アウストロ・ファシズムは「緑色のベスト」と呼ばれた。山口は言う。「当時のオーストリアにはむろんナチスの手先も無数に存在したわけで、ツヴァイクの住居の家宅搜索の一件にも間接的にはその種の連中の暗躍もからんでいたらしいが、それにしても、以後八年間にわたるツヴァイクの国外生活の直接的契機となったのが「緑色のベスト」の蔓延であったことは間違いない」（八七頁）。

- 12) 同上、八五頁以下。
- 13) 恒木、前掲書、三二五頁。
- 14) 同上、三一九頁以下。
- 15) 同上、三一九頁。
- 16) 同上、三一二頁。
- 17) Zweig: Castello gegen Calvin oder Ein Gewissen gegen die Gewalt, a.a.O., S.12. (邦訳、一〇頁)
- 18) 恒木、前掲書、三一三頁。ここで恒木が言う「われわれの問題、われわれの争点」は、ツヴァイクの挿入したラテン語の一文「ワレワレノ事ガ論ジラレテイル」(nostra res agitur)を「それはわれわれの問題、われわれの争点である」と訳した高杉一郎の邦訳に依拠したものと思われる。
- 19) 山口、前掲書、八九頁。
- 20) Stefan Zweig: Briefe 1932-1942. Hrsg. von Knut Beck u. Jeffrey B. Berlin. Frankfurt am Main 2005, S.102.
- 21) 渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』、前掲書、二二四頁。初出は朝日新聞社刊『三つの道』(一九五七)に収められた「ジャン・カルヴァンのこと」。これに加筆したものが白水社刊『フランス・ルネサンスの人々』(一九六四)に収められ、それにさらに修正をくわえたものが筑摩書房刊『渡辺一夫著作集』第四卷(一九七一)の「フランス・ルネサンスの人々」に収められる。本稿で使用了岩波文庫版『フランス・ルネサンスの人々』(一九九二)は、上記『渡辺一夫著作集』第四卷を底本としているため、作品としての『フランス・ルネサンスの人々』の出版年を一九七一年とした。以上の書誌的事実については、岩波文庫版の「解題」を参照されたい。
- 22) 同上、二二一頁。
- 23) 同上、二六四頁以下。
- 24) 同上、二七〇頁以下。
- 25) 同上、二七五頁。
- 26) 同上、二七七頁。
- 27) 註 21 を参照。
- 28) 渡辺一夫『寛容について』筑摩書房、一九七二年、一三四頁以下。
- 29) 渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』、「解題」、三六四頁。
- 30) 大塚、前掲インタビュー、五九一頁。
- 31) Zweig: Castello gegen Calvin oder Ein Gewissen gegen die Gewalt, a.a.O., S.10. (邦訳、八頁)